山幸彦

桑田昭弘（中四国支部）

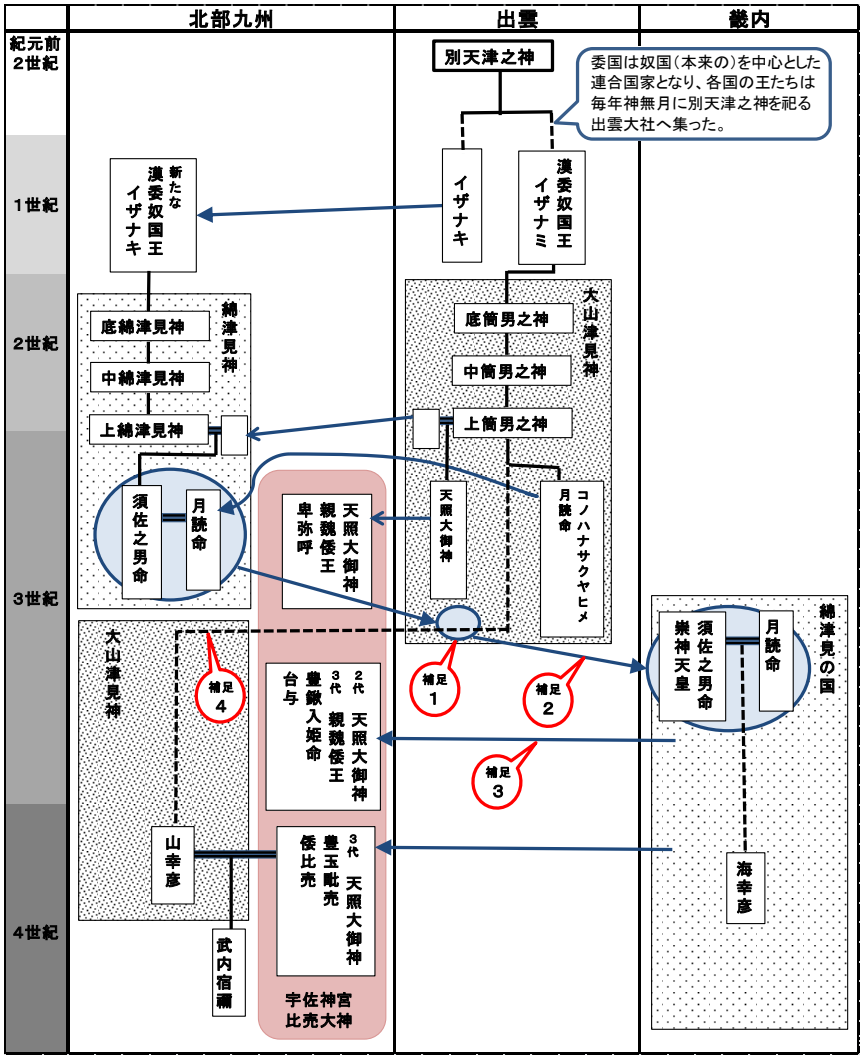
山幸彦の出自を古事記では次の様に記している。

「ニニギノミコトが一夜契を交わしただけの妊娠を疑った。これにコノハナサクヤヒメは、『天津神の子ならば無事生まれる』と言い火を付けた御殿でホデリノミコト（海幸彦）、ホスセリノミコト、ホオリノミコト（山幸彦）の三人を産んだ。」

コノハナサクヤヒメは三つ子を産んだのだろうか？

恐らく、その後の歴史を繰り広げる海幸彦、 ホスセリノミコト、山幸彦の三人は天津神の流れを受け継ぐ人物である事を告げていると思われる。

筆者が妄想する山幸彦の出自を以下に著してみた。

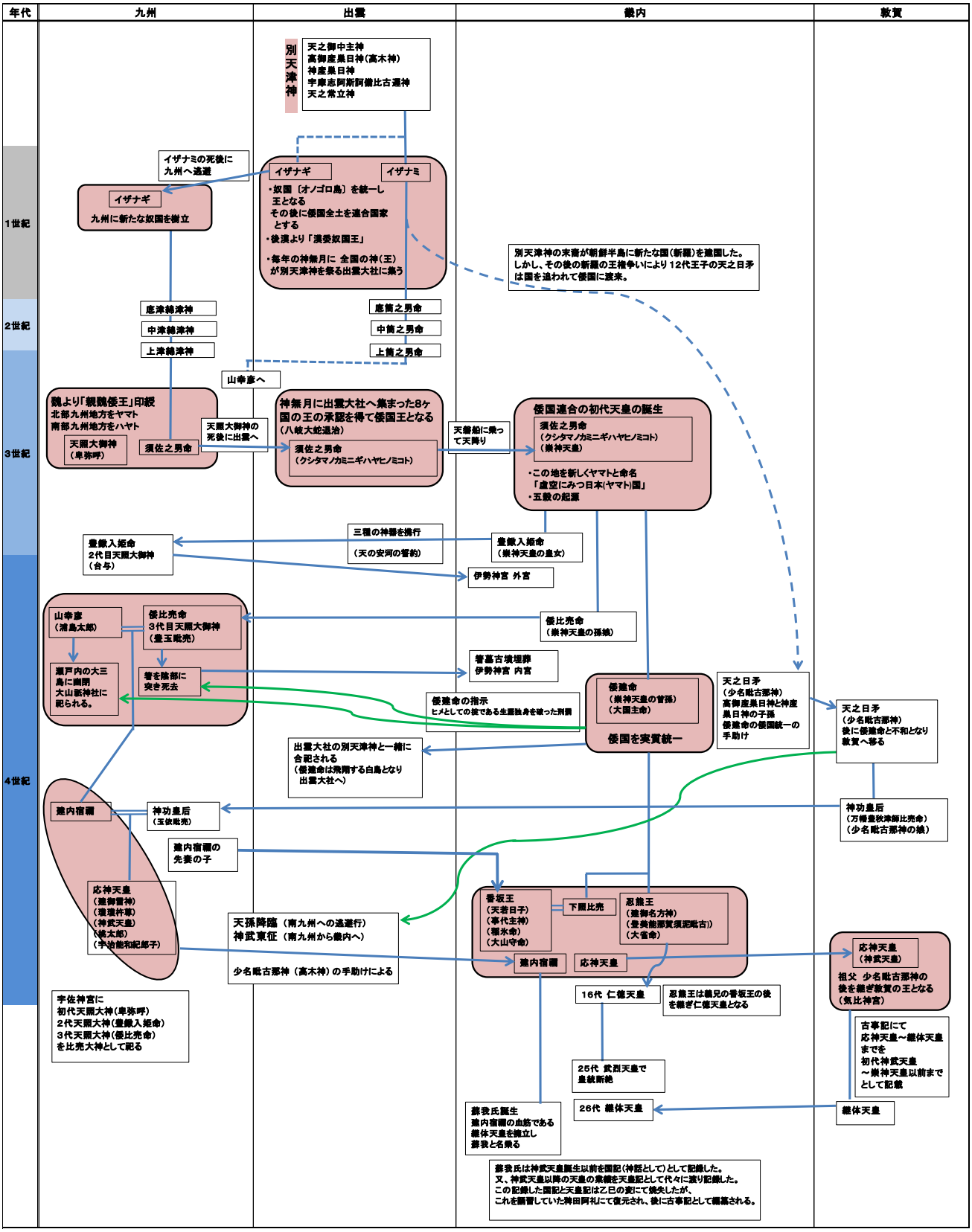


補足１．卑弥呼（初代天照大御神）の死後、須佐之男命は出雲へ行き、神無月に集った八ヶ国の王（八岐大蛇）に認められ次の王となった。須佐之男命は王の証である出雲の神聖な櫛を授かり自らの名をクシタマノカミニギハヤヒノミコトと名乗った。

補足２．王として呪術的能力を求められた須佐之男命は、三輪山（畿内）の神（大物主大神）の末裔で呪術能力を持つオオタタネコを呪術王（２代目親魏倭王）とした。そして自らも天磐船にて畿内へ天降りし御肇国天皇（崇神天皇）となった。
崇神天皇は新たに治めた国々を故郷と同じヤマトと名付け人々はその地を綿津見の国と呼んだ。

補足３．倭王（天照大御神）としての決まり（宇佐にて祈祷する未婚の皇女）を遵守せねばならなくなり、崇神天皇はオオタタネコを廃し、１３歳の娘（豊鍬入姫命）を２代目天照大御神（３代目親魏倭王）とし、三種の神器を授け宇佐へ送り出した。

補足４．須佐之男命が畿内へ遷都した為、本来なら綿津見神（海幸彦）の役割である天照大御神の補佐を大山津見神（山幸彦）が北部九州へ移り担った。

付記

下図は、今回投稿の「山幸彦」と昨年１２月投稿の「天之日矛」の要旨を２０２２年６月投稿の「日本の始まり」に加筆・修正した系統図（古事記等に登場する人々の年代、地域、相関関係、系譜、事象を著した図）である。